# 第６節　調査の成果

## 第１項　調査の成果

（１）本丸跡及び天守推定地における整地面

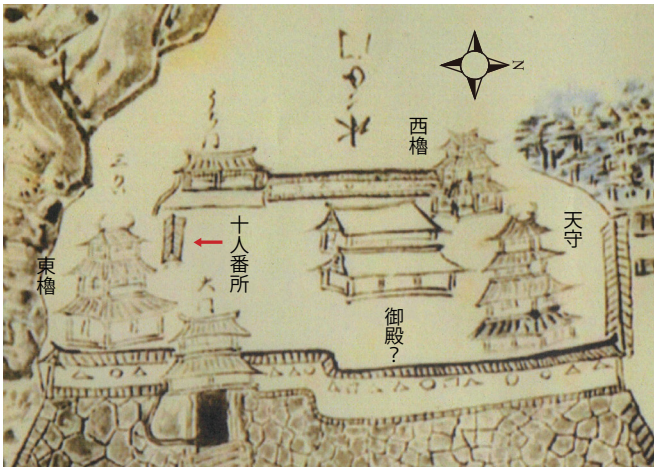
令和元年度の本丸跡の調査において整地面を2面確認した。慶長期整備及び万治・寛文期整備によるものと考えられるが、特に万治・寛文期整備により1.8mもの大規模な盛土・整地が行われていることがわかった。文献記録に本丸の地形が五尺余り上るとあり、これに該当するものと考えられる。また、令和4年度の天守推定地の調査において整地面を３面確認した。天正期、慶長期、万治・寛文期の３回の整備による整地面と考えられる。これらの整地面が把握できたことにより慶長期の本丸と天守台の標高、万治・寛文期の本丸と天守台の標高が推測できる。また、天守推定地は改変が著しいが、慶長期天守台が一部残存している可能性があり、その範囲は東西44m、南北26mの範囲である。

（２）天守のものと考えられる礎石

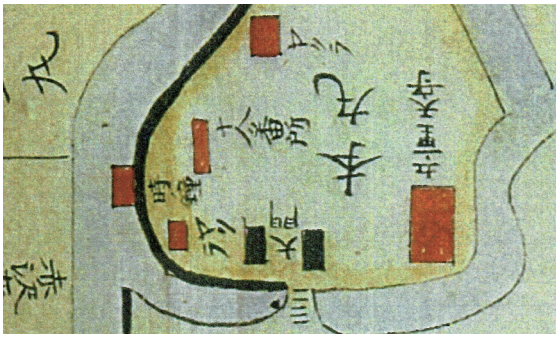
令和4年度の天守推定地の調査において、慶長期整地面、万治・寛文期整地面において、天守に用いたと考えられる礎石を検出した。正確な位置・規模は未だ不明だが、ここに大型の建物が存在し、地形の嵩上げを伴う建て替えが行われたことがうかがえる。天守だと考えるならばその規模は３～５層と考えられ、建物或いは天守台の平面規模から類推できる可能性があるが、この点については未だ不明であり、答えを得ることができていない。また、「正保城絵図 上野国沼田城絵図」では、天守や櫓などの主要な施設が白壁に描かれているが、漆喰がほとんど出土していないこと、釘が多く出土していることから、板張りの建物であった可能性が指摘できる。

（３）本丸跡で検出した柱穴跡

整地面において柱穴を３本検出し、うち2本で柱痕跡を確認した。２本の柱穴は同様の規模と構造であることから建物を構成する可能性がある。「猿ヶ京区有文書　上野国沼田倉内城絵図」では、大門から本丸内に入ったやや南側に建物が描かれ、「川場村歴史民俗資料館　沼田城下絵図」では同様の場所に施設があり十人番所とある。十人番所は、寛文10年５月に建設された建物で（真田氏家中役人諸事奉覚書）、今回検出した柱穴が掘立柱建物の柱穴であればこの十人番所の柱穴跡の可能性が




第180図　猿ヶ京区有文書　上野国沼田倉内城絵図（部分）
右が北　群馬県立文書館寄託



第181図　川場村歴史民俗資料館　沼田城下絵図（部分）　右が北

考えられる。

（4）沼田城初期の堀跡

令和２年度の本丸堀跡の発掘調査で、本丸堀よりも古い堀跡（馬出堀跡）を発見した。出土した土器の年代から、この堀は16世紀末から17世紀前半にかけて機能していたことがわかり、真田氏によって近世沼田城が大規模に整備される以前の、真田氏入部直後の沼田城の姿を捉えた初めての発見となった。

（5）破城遺構

令和２・３年度の本丸堀跡の発掘調査において、天和2年（1682）に行われた真田氏改易に伴う沼田城の破城の痕跡を検出した。沼田城の破城については、その状況を記録した文献史料「沼田城破却記」、破城の場所・方法等を示したと考えられる絵図面「中根家所蔵　上州沼田城図」にその様子が描かれていることが知られている。沼田城は、これらの情報と発掘調査成果とを一緒に考えることができる稀有な事例である。

（6）保科曲輪腰曲輪群

令和２・３年度に実施した測量調査において、北側段丘崖の腰曲輪群や道跡、湧水を利用したと考えられる施設の存在が明らかになった。これらの施設は絵図面にも描かれており、沼田城が台地上だけでなく、段丘崖を巧みに利用した北向きの構造を持っていたことがわかった。北側斜面を意識した防御施設は、倉内城段階＝沼田氏段階の遺構を捉えている可能性も考えられる。

（7）沼田城の全体的な構造と規模・範囲

発掘が容易ではない市街地や、広範囲な探査が可能なグラウンドにおいて地中レーダー探査を実施し、二の丸・三の丸・外曲輪の堀跡の位置を把握し、沼田城の全体的な構造や規模・範囲を明らかにした。沼田公園グラウンドにおいては、二の丸付近の堀跡が明瞭に現れ、その痕跡をクロップマークとして目視することが可能であることを明らかにした。

（8）石垣の特徴と変状、西櫓台石垣修復工事報告

沼田城の石垣は、切石ではなく、打ち欠く加工によって整形を行い、石垣の表面を整える意思が強く表れている。また、安定性を捨てて石材が大きく見えるように積むなど石垣の見栄えを重視した構造をしている。横長大型の石材を弧状に積む点も特徴である。石垣の構築された年代は明らかではないが、本丸石垣よりも西櫓台石垣の方が垂直に近い勾配をしており、古いと考えられる。石垣の石材は文献史料から、現在の奈良町奈良坂、及び下久屋町観音坂で採取したものと考えられる。西櫓台西面石垣は、平成16年の新潟県中越地震や、御殿桜の根の伸長によると考えられる変状が見られ、崩落の危険があり注意が必要である。また、昭和58年に実施した西櫓台石垣修復工事について過去の記録を再構成し報告した。石垣調査については、本報告とは別に『沼田城跡　石垣調査報告書』2024で報告した。

（9）沼田城跡地下遺構の保存状況

これまで大正５年の久米民之助の公園整備により沼田城は大きく改変されたと考えられてきたが、本丸中央付近では沼田城の旧地表面が保存されていること、グラウンドでは二の丸付近の堀跡がはっきりと捉えられることなどがわかり、沼田城の姿が地下に良好に保存されていることがわかった。

（10）真田氏の３期にわたる沼田城整備

沼田城に関する文献史料について調査を行った結果、真田氏による沼田城整備を、天正期整備、慶長期整備、万治・寛文期整備の３期の整備が行われていると整理した。本丸跡の発掘調査では２面が、天守推定地の発掘調査においては３面の整地面が確認され、大規模な整備が繰り返されている状況が読み取れた。また、北条氏が沼田城を支配している期間には北条氏が整備を加えている可能性が高く、沼田城の持つ複雑な歴史背景が、沼田城を捉えることを難しくさせている。

（11）沼田城で用いられた瓦の変遷と特徴

沼田城の瓦は初期（17世紀初頭～前葉）と後期（17世紀中葉～後葉）の、大きく２段階の資料が存在する。初期の資料群は関東の諸城郭においても最古級に位置付けられ、金箔瓦や洗練された文様が見られるなど中央の瓦の影響がうかがわれる。沼田城の瓦は中世城郭から近世城郭への転換を、瓦から捉えることができる好例である。

## 第２項　沼田城の特徴

沼田城は、戦国時代に築かれた倉内城に始まり真田氏の整備を通して近世城郭として完成した、中世から近世に連続する城郭であり、その遺構が市街地にもよく保存されている。完成されるまでの過程では争奪と普請が繰り返され、数多くの普請の痕跡が積み重なっている。

沼田城を近世城郭として完成させた真田氏による整備は、天正期、慶長期、万治・寛文期の３期に整理され、発掘調査及び地中レーダー探査により捉えることができる。その構造は、沼田台地西端に本丸を構え、東西700m、南北700mに及ぶが、台地上の平坦部だけでなく北側段丘崖を巧みに利用した構造を持つ。

天和２年（1682）に真田氏の改易とともに破城されたが、その痕跡が良く残されており、破城の様子を伝える文献史料や絵図面と併せて考えることができる。

沼田市に分布する荘田城跡、小沢城跡、幕岩城跡、倉内城跡、そして沼田城跡は、日本における城郭の発展史をよく物語っており、地域社会が変化・発展する様を、考古学的・歴史学的に示している。

## 第３項　沼田城の価値

沼田台地北西端に築かれた沼田城跡は戦国時代から江戸時代の城郭で、戦国時代には上杉氏・北条氏・武田氏によって争奪が繰り返され、戦国時代末期から江戸時代初期には真田氏の領国経営の拠点として機能した。

標高413mの台地西端部に位置する本丸を中心に、東西700m、南北700mの範囲に曲輪を配するだけでなく、北側段丘崖を巧みに利用した構造を持つ。戦国時代に争奪が行われるたびに手が加えられ、江戸時代には真田氏による３期の整備が行われた。そのため、沼田城には複雑で重層的な普請の痕跡が見られる。天和２年（1682）に真田氏の改易とともに破城されたが、その痕跡が良く残されており、文献史料・絵図面・発掘調査成果を併せて立体的に捉えることができる。

大正時代以降実施された公園整備により城の姿は改変されたが、本丸中央では旧地表面が保存され、グラウンドでは二の丸付近の堀跡をはっきりと捉えることができるなど、沼田城の姿は地下に良好に保存されている。近世城郭としては市街地の中で良く保存されており、多くの情報が残されている。

関東で戦国時代以来の領地を江戸時代にも保持した大名は真田氏だけであり、真田氏をはじめ、上杉氏・北条氏による争奪と普請の歴史を一所に留める沼田城跡は、真田氏の領国支配のあり方を知る上で重要であるだけでなく、東国の戦国時代史を考える上でも極めて重要である。